

六百萬文合

七

左大將家六百番教合卷第十七目錄

憇

亥月亥 亥也憇 亥用亥 亥雨憇  
亥火憇 亥山亥 亥海憇 亥何亥  
亥開亥 亥橋憇 亥草亥 亥木憇  
亥鳥憇 亥獸亥 亥虫亥



高上皇

高祖

高麗

高麗

高祖

高麗

高麗

高麗

高祖

高麗

高麗

高麗

高祖

高麗

高麗

高麗

惠

惠

惠

惠

瓦大將家六百番歌合卷第十七

憲

一番

亥月夜

左

勝

絶賜

良く山々一月やもうてそゆごとなく急やじき一矢をにうは

右

信朝

月よなとく下りそあられまくらまくらの波そぬとつれとも

右方や一云瓦奇不取

瓦かア云月よ打すや耳ア立又下匂ひめり

判云瓦奇日ふもとそバヒソ人ひ優るがてし云月うと

どきておさせれ事なし以ちゐ筋

二番

左 勝

乘達

又小まとりひてもいづれの極め月ゆへりて人となつて

右か「云瓦舟を会

左方ア云左方不疑ア

判云此番左方ア伏ふきうきといふる勝

三番

左 拙

季經ア

左も右にんとくらむて庚申の月新計ふうそよみのやせ

中宮皆大丈

秋の月もうなうけ西うひを抜ひゆの事とすうり

右

左方ア云人となりましとく所をひてを新うる」とりまし

うをそくゐらうとん事アいづ

厄か「云石舟を車なり

判云左方月さそひにおなとヤセくやんれども

四番

左

五家名臣

五番

右 勝

家體

ウツホトゲラヒのありえを人取うみて月とみるう

右方ア云左方無取之由ア

左か「云右方頗宜也

判云元す取之由アとき承連と月ゆへりて月とみる

くもうぬをとくりきぬりと殊主事やとすすめちゆは  
右手 頭宜ともいふ定らゆあひひまげもふせ  
可慶貴都ともきあもすやんじとみうりんゆ仍住本

人ト弓いふる勝

五番

左 持

定家朝臣

五すひよせけまくれはの新わの候乃と神乃まく

右

信宣

をほりゆりせひやれどもとりひしやこうひ月とみる迄

かかやへて左手ひもす

左方ト云とろのみもせうりぬつゝ又ひぬ

判云あ前ももすむうきよやとく約束した左方人され

六番

左 勝

女房

袖の上よかひもへ力ひとぞうと抜とやせざねの表は日

右

経家つ

ひづりもひ者のあへたとおとよまかせよアリの日  
右あやまを左手を取

左方ヤト云ふき志ひ不義

判云左手を取ゆりする勝

七番

左

あやま憲

経照

へ旦ちとよりてもむひにならむるをえりやア晴れ

士番 右 勝

達あ郷

いゝさんもじもせにうきまんの意する者どうぞアソブ  
右かド云ふよお返すよつて左

左方ト云左寄めつゝしかくす

判云とよづくとばくとくとくすゆまとやミーされ  
ねきとりひすてうち後うぢりの左方ト云小跡そ  
うの跡と侵入るふ似ら勝也くや

八番

季達つ

左

えひすれもひきせにうみのせひとひうどり

右 股

対達

人を遣ぬうみへモ乃まばれやはまれを神代ぬとゆうらえ

左ふせによもまのトヤト

判云西首よりそづくもの差別トト包ひれを神代を

ソヘビヨリノガハシ又ふる勝

九番

左

通家羽臣

えひわひてひをまかうきもやけあもたゞそもてをなうづか

右 勝

信五

志一トウタセの煙ルモトナハモラ高マやつててひあん

左かド云左寄ト云まひあとそれアヤ

左方ト云左寄ト亥煙足九

判云左寄は承取内裏寄合相接すそんとなくひそ

ナリ我亦やせりひつれもとそくはとあまハほ世やとい  
いをる事たゞひよしむ哥トの事とよやれて  
ふくまんと云れようくとあわせがみゆうじと

十番

左 晴

定家朝臣

時のちふをもてたうひを白むらむりかへりあひにぞ一や

右

中官佐太丈

あくのあくひもよ日教をくもに年とあめりひの

右かや云ル哥不取ア

龙方下さ右あやそか化者名哥也

判云まつり年とくのうとく室トシラシム

人ニ又とり出られてもやうふりぬのり下ありくや在ば

十一番

左 持

き家朝臣

弓の志やこれ巧まとのやれまうそ小乃ミトテモ無くへき

右

澄信朝臣

をれぬうねやりる月と教き奉てひくわじきうきふるを

本かア云龙哥一鵬又文字さくへら

た方ナ一云右哥可す殊取

判云左方哥人令ナ之を与ふるナ是以依漫せりふる

令ナ一時は主を懲不ナ若云念セ申み掌る鵬若さくへ  
たん可考事ナセ元守カ一又字殊ナシくをうつと

雪とゆう右お圍りの月不度身死但石を上向よろよ

御らるを心下句優なりて仍可る捺丸

十二番

左 挑

女房

毛うきとうふゆうむぬようじまきつへうせんかくひは  
右

家燈

やりひやれり先も今そまくねもひとうじ又きのくも  
右あやえさめひやせうそも下りだれ  
厄方ヤハ右寄毛新丸

判云左石西首下毛アシテ、もうとくとくみしゆまたのうま  
めるじたまよふりきりつぶきりつけくとあの寄毛  
十 あもどちゆへふりぬようとこれひ事とソミトモ  
ゆくても以重一毛うきと立廻ヌマニふそきらめ毛せ

れもそのくへうせんせはと云れたゝてはてし但右  
いとうひタモハ云又優幕よすゆ我猫とくくや

十三番

寄毛憲

左

季澄

ひづり綱のうきかにか取れ秋はとうれびた人のあく夜せ外  
十 右 脇 經家帰

タバくれ吹くれ秋のもうツ聲を立とね人も立とや志ひうを  
厄右せ立可ア一事

判云左寄トウカウて約フやうニ方をつゝキモキモム  
寄殊子アホアレモ可晴アヤルヒシキモ

十四番

左

魚家胡昌

ひより海の床すゝ吹くれ秋風りまご我意とぞろひすらん

右 脇

中宮院大丈

にてへふともぬ去計々はもうつとせと小もすり細と

左方トニル又乃字行樂年

厄かドえおえ渡かくや

判云不うつむそと云たまうようく傍ら可る時也

十六番

左

経照

信朝

心うひの風引てへすまゆら我すきうそしにぞりぬ

右 脇

信朝

えよギーととの坐りぬれ故もてく淀とらうモソノまつれ  
石かや云風引てへとおれ事にぬ様也

十七番

右あやま石奇世持歌

判云厄か風引てへとえれをばすやそぬてまみぢの

くらをやうりぬるのこふう我そきとぞくい、奉  
十五小原と思ひ候ふれむうも不なくや石奇の方人も

毛絆とやうり勝約

十八番

左

定家朝臣

さすれマ一葉うさぬひもも小ども抱うと見ねのこりハ

家燈

抱ひりふカもだれいと萩の葉うれと取沙きう松の夕因

厄かだうひよヤ不じぬ之由

十判云ぬ方さんま不ひ得之由を強以不強判天ア元可ぬ持

十七番

たまひやうへあふとひめの由を新く下りて  
女房

ひりもまく抱きや人のふうこみタくれの秋させのえ

右 腹 信五

ひあみあらすもくさんもしくに大きいやせに庭のひい

死石せじゆられら

判云この夕あまたのころうのまよすや秋風のむかと  
あそりくやわの庭れね風よりしきら可る勝

十八番

左 腹

左 腹

ゆうてまふうみんと思ふゑ死もうの衣ひすそみ秋風う吹

左 腹

左 腹

ゆうびれあとひもうづきのあ小袖けりよ袖ひわくまくは

右方ア云化寄頬を感氣

左あやア云不争金不感

判云右方アヘアうんを感氣右金不感云不及ぬは丸ハ

たぬ勝

十九番

あ兩憲

左 腹

きことア云候ア神を拂ひてすうひひもすまよゑつれ

右 腹

中官宿大丈

志史ヘニカモトア小年と見てひのうちふうまくよあら

右アア云モトアトア南歎とぞゆ

左方ア云カモトア山争ハモテムシナヒ事みカ

卷之三

利の元のトと不徳をばぬ良をトトヤリモト  
アシトナリヒキムトモテ海モ代リモナケヌモアラ良  
モアラモアシムキムシトヨメ生石乃カモアシヌハ良  
シヘニトヨシモシの如モアシトヨメレ右脚シテ

廿四

九

卷之二

あすをき人経ひそうわざりとおしのきよはりと風

七

四

卷之三

たのめねと済ますが、心を病む者ひへり。——やう  
心かゝる事年々

心かや云石集

事にておもふてくえと云ひあつてゐやせ事にてやせす  
ゆゑ道よを由もなきてらやしとひあなづくと又はの  
國乃えやまやるうじあはうこまうりふなくやふ等一平  
櫻月りんも勝とうそゆうめ

廿一  
番

九  
指

通志

卷之三

七

隱信錄

ひとりの床ゆもぎともそうもみつふそくを脱のあれ  
ぬかやまへ危きめくすこゝくくりひなづけづれ  
元方やまへぬ哥くぬとて床ゆもがとるらん

判云凡あくま一ひとの身の為め事アリトテル行き立又

晚の後優子とすをあするを知ふとよ

サニ番

左

三歳初月

ひとりのと称すのよへぬとあもとにてぬも波もふと見まし

右

秋

深遊

よりえのゆりあす行波思ひりん家うちをさむ晚のあり  
右方ヤ云左寄ましもす

左方ヤ云右寄とひそてもえあくと

判ニ元寄ばまと額字小大のまとふゝゆへ乃ぬけ  
トや右寄思うらとさじふとほ事うじやい左の勝

サニ番

た

勝

三歳初月

ありうどをこうひうきとれま神よゑの叫りのねども

右

家深

こゑんと絶えゆりけのぬをゆうべみゆらじとうすれ  
右方ヤ云山はとそとえみ字ちよづくと

左方ヤ云新政の寄云ええとひりめくせうとみの

降ぬと袖けむかくあくひじうすれとよづく寄ト云

判ニ元ハゆみ字ちよづくとちく新政うへや云

ふ撰集などのはのけの寄とさりあへとく又人を取へ

あふゆりもゆれを左方人とく被災快又トウリモト以  
相似せにからずともゆらくきてよづくまたみ字と等

なうるをのす勝るや

サニ番

サエ 厄勝

女房

ううまねの物の本をかそくてもなとあまうりゆう裡にぬれ  
右 おはせも

信五

まとほる事とん物の夕暮りめ走りあまう雨れをとつも  
右 方ト云厄勝を頼

左 カナト云厄勝すへてじゆつす  
判云厄勝除く事とまへよりあた本もぬと小さくふ  
うりてはるア右方ト云厄勝を頼と云ふのあつもなりませ  
まわれてしくもきうえ作業といひもみのうとくもせこゑ  
えみれ奇そとてじゆつす耳ア左はくのまゝ事に  
けのまく強しゆくモア由なくして立ち事務背く約モ  
めぐは番も石とてひゆつす厄勝ナヤ云く仍へたる勝

サ五番 女房

右 指

季健卿

りそのそじと底ちの墨の煙ふり、哉アヘキハの所れど  
右 謂信名臣

つれなきよたへを厥うん候とも我れどもひのアカシ

左 おせや 胞孙之由

判云まうのまね候を我あるなひももうてつもせんやうれ  
あさうたへを盛りんきふとをも志すとくと繁  
して、ト、ふもりもねりやうととほくしま事へ小  
らへし指すとよや

サ六番

左

勝

五五朝后

志志取ん後と思へしめを立たれりへりしきそのきふと

セシ右

擅まつ

立立ぶん後ハキムリとみの源よりもう一方へうれないく想よ

左方トニカルキテ取

左方ヤニミアヒルム

判云ぬかの志立ぶん難モ勝劣右のあられ本へうなぐも

モ因リモ立トモモされリヘラウ

ナ七番

左 扇

立家朝臣

うき人み思あたるカヒトテラスミテ立のノフミタリ

右

中宮權大丈

ひナ即く志する人や品士れ絶の縁ぬ煙ともモリメノ

左方ヤニミアヒルム

元カヤニミアヒルム

判云左ノ志き人右立する人おとモレ

サ八番

左 扇

立家朝臣

限立木トの里ノゆくをもんじふのうそやみるつま

右の脇

信五

リイヤクの煙と因リミテ立ひる人のひそむりよ

左方ヤニミアヒルム

左方ヤニミアヒルム

判云立人ちよしとアホ石子のつ變アリモと

ソリ中又立人アホアホアホアホアホアホアホアホアホ

きらめいた可る様

## 廿九番

左 肩

女房

思ひよし心のぞ小鳥の音ふりみせらや筋士の巻うりうるをて  
右 家燈

筋士代海の煙もなとどう立ちれられうへうれぬそ思ひひすく  
左 あや えひのやうく

陳えひのをよいてん月とそと新月ひえ

右 又下 え筋士代煙ふうりうるてんきてハレふうくそした  
筋士はきふとこうきかくめ又うひの煙もなくてむれ  
うふ里とほてん事もいづ

左 カタ え右角 似宜

判云死守一人の歌柔くかゆめまとみせらやうのまに  
まのをととえに姿詞う跡れぬめけん手りもまくふと  
右 おほよぬへ 但れ以死ぬ勝

## 三十番

左 肩

旅宿

なみのうだれやく監煙せんば我ふとてくやまんもやす

又右

寐蓮

山ゆりうかひやう下の煙うこうこれもやうねたくひ服ひれ  
右 方下 えをまを掲歌

左 カタ えつひを小山ゆりうといほん事いづ

陳えりのやとえハ廉少金も禁みりうりを上山ゆよ廉とよ  
せう半にうとなくきざれ地くもどくろてやくとぬす

やうまうらうへ舍と併て野やぬりもとひやうを云  
と公民りヤトき己あ裏の書寫アヘひらを  
又耶ト云ゆはも小もん敷隆も蚊火の致アヘらを  
まきのふゆめ山方空葉よ廉火香火とてす室饅飼とりふ  
山文字と刑せん粉め山事之致一行ア廉火とま不宣れ  
又陳云まきも恵の證といひも耶信受り又うき露とて  
うて所くあるも山麻火ふくのつとてて露わざも成  
後れすや又人九集よこひ山つひやウトふりくうも山  
かとよりウチアまほ山田ア後るしとくしら

判云五のあうのア上ト文字ほくさりひづれへてモテ  
ゆめり石麻火やウトの煙をあき回答アヘして行へし  
間の云新陳未雨及之並よ春ハ季のまよや蝶のふよみ

三脚の事を委注アルふえアヘ今回答よつとす  
とお遠アルふえアリアヘの山事もくのじく  
もそる事ばれこうれもやくぬういづくとえもんれヒ  
ひやれすアルふえアルふえア遠をぬり石又やく燭煙  
させれ安歇ゆめ連と勝勢不ふぬおとアヘ

### 一番 岳山憲

左 挑

絶賜

年とて毛うびけきとくもどなとふくらむ山の山

右

中宮援大丈

毛ひつまくいくひとほくも山をけれぶりされこゑもとね外  
石方ア云た哥うきの思ひれ山耳と張し

左中一云ふ争可ア事ア

別云西あひとすま歎こしむひづくも北勝勢なりふ

一一番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す  
我迄よりうきりてと山へりてよくわくの岩のうげ道

平右 脇

家路

えみそとばれぬ氣とのつれを山野の奥の岩のうげ道

右方へてとせば山へりてよ

危あや山が奇を甚

利云左の吉野乃御くの岩はりみちりへと上り

もとて左をきくよりとお舟を船を仍泊する人

二番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

三番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

左 腸

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

四番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

左 腸

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

五番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

六番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

七番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

八番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

九番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

十番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

十一番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

十二番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

十三番

左 朝日山 朝日山を望むるを記す

李健郎

幸川右勝

信之

吉野山こひのあそりかせひづくぬ中くゆも人やよも  
左ふせりて右勝之由

判云左守年月をよろんせんせん山ひりやふすり  
の山かくゆもとといへれりくまもいふる勝

六番

左勝

女房

すゑれねまつよくひるりん山みす波と神よすみそ  
左勝  
人とももえすいとほくも山むようだぬをあげきりるを  
志な方や左守神工さうと行様かうのするゆる  
左かや左守くもやあとひだりとおれ日とされしも

寺すとこうりひなけられ

判云左の神すくぬつまでへそすけをきあれと左の  
山ひり山ひりうらんとあれをきゆきとみぢり  
ふきるもや左の山ひり波うそち下さくわはうめ

六番

左指

定家絅臣

是引の山波くぬうひる神ハうう人のつゝきうぐう  
右勝  
深草

ば世よを吉野の山のねくはすうりとつときふうすり  
左方や左守左を山とさうとれいしく秋うひる神人の  
あ／＼歌ひゆ

左かや左守て右勝

判云左角取於山名を以て可後より不老の目餘之事取  
ひもとやうらん右角源道の心あまうやうじは伯  
夷叔女ゆ子准などふ首陽山ゆ錦上山ゆものゆとて  
たむしてようはれきて城物及東也遂もあ事も可取  
仍ふ角不許得乞左主教お松ハ可る持也

七番

青海戀

左

旅賄

くらうどううこうえ海ノをよもよもとぬらうのうん

右

勝

達

りもみゆくらうのをもたとつてもほきはよぢうかに恨み  
むすやうえを角だそろくや

たか丘拾歌。一弓

判云左角くらうやううじよう万葉集。うすく角は是も  
大角と鹿鳴のね角吟のギリともぞのをはなうにはよや  
勝流而いとれそろくさくらきくわ春室の蓬壺と弱きと是太魚  
射よかくを佑うりともうれとまでそちもさりまんもあ  
そ優勢ばん事よう可金産者と今愁人系の道のがまと  
あやかのひよかしおた方角ゆうしよへいふる勝

八番

左

五五朝臣

右

わのほりゆはやすたはらうくし見ともすとみまると  
わのほりゆはやすたはらうくし見ともすとみまると

か方アムテオノ不被事レ  
カカヤムル事モテ

鉢底

判云凡手之れ番の力手の内所と廢せラリヤモ  
上浪定てよりあんすし又うひをてまつもせんむ  
うト包ヒトヒ輕ナリトシムソラヘ可る持丸

九番

左 腹

兼ふ胡

思ヘシモミニシヌ往トシテ盪トヘメラ残ハタツル

右 陰信朝

岩詠うわあラ残波ハムシテマコモソナラ神モウラされ

たむ手アム海ヒ出之由

判云左ム小海心幽之由ぬ行方モ漏盪モリシム残ト云

右も岩詠うわあラ残波とニ海ヒ西に立てハいづ右  
モ立残波ヌシクともシテソアラソイツノ神モムシムモ  
奈トウラ侵行ノツノ勝

十番

左 指サシヒテ季縫緋

志付キモテシムテアムカウニ海のゆく乞モムシム思ヒト

右 鉢底

伊瑞の海ハ漏激モラムシテさくき石の子アテシム思ヒト

カカヤムスル事リムラメト

左方アムムム主之哥也

判云左ムシテアムジムテアムシム又テムシテ

リモシモスムやめうム主之アムジムモ不及左方也

方不強勝勢もや

十一番

左 指

定家納臣

と張りの所人のひをうつり化れきり みの辺れみ不うせ  
右

信五

わこのみの波ハあぢよ人をもし心のうすんのからひら  
ふかヤト云下ちゆの文字も無かつうればやとをなく  
なうもあめり邊ノ邊ノ邊ノ邊をいづ

左方ア云人もじきくふく

判云左方に字證不可勝計又うなりや只同車や誤て  
絶や今や同字證不可勝計又うなりや只同車や誤て  
は奇をのうてまことにうちも又邊ノ邊ノ邊ノ邊をいづ

魚ノ左の奇波れあひふ人そぞじ又文ヲ少くうこ  
此モや凡ハ左奇歌不論證淺としてまぐ今百段の方定  
十六儒令佐候凡て勝劣と申むとは詮過蒙之所及可み持

十二番

左 腹

女房

よ乃の海に冲山邊ノ勝浦よりねまうりと人ふきうせん  
右 中宮權大丈  
彼くろ子ての後乃若承ね振よりうれてかまくらもく  
右方ア云左奇歌持取

左方ア云左奇歌事ナリ

判云浦ノ一すけひと云れ上トウれトくさこやふ奇詞  
優よぬとねうよするもや似てはうんが左の勝

十三番

秀河憲

左 持

絶賜

す後れありばれは水にすれとむるをすりて

右 信五

信五

淀川すれもくぬとほくすあす筋よ歎ふきるれ  
かかやくすりばれはすくばれとまづめ  
た方や云なきうじ詫めまちうらしくやべかく  
判えありばれほめのうとくハぬとくにゆくめ  
十一のたはくもあすとよやゆうく可持や

十四番

左 持

定家納

りりゆゑもあすとゆつてかみの川よより急をもした

右

絶賜

水せせ川あきよ翠と碧くもがみこそ地よりぬそさま  
か方や云方寄不耳ひ

左方や云上工漬とくも下すをゆくとそりもぬけま  
又漬く漬くもとりよ事はうすも上下くわまれ  
千ちてそくれうのう

判え方持か人不耳ひくと寄又を歌主をひてすゆ  
證候已を惑ひた雖不耳心持歌を不す以て可る勝手や

十五番

左

五絶朝臣

むり人のひひいふみもくをしてうことさうもたのまし

右 腹

中宮宿大丈

荒島川あり深ひまうにせ中か人のつゝこううらうたりまろ  
ふかやへて左寄り無類之由ヤ

左方ヤヘテ深渓ひ下るまゆ行

判云もうち川あくミナリ根ふかしはとせりやとろつか  
段根ふかしめうを荒島川渓渓ほなきりと約此こうも  
まゆもようくかしゆりへ左の勝

十六番

左

魚宗胡

つれはと人こそえよねりひ川あふ深ひくぬかと根ても

左 脇

澄信朝臣

玉房うだく根とす一良川とく岩神のふよしうつづれ  
左方ヤヘテ左寄り無類

左方ヤヘテ左寄り無類  
判云左の邊川伊いぬせモモモモモモモモモモモ  
さくや可の勝

十七番

左

季瘦彌

人ひさみ足をひりにこれ深川まれよもあされ契りひくう  
右 脇

家澄

ひふとて新とひんまつありく川神はく根ハ唐ひうつとも  
左方ヤヘテ可て取事之由

判云水を川をのこを津ひふなどれ、一れをぬよそこ  
ゆうほとんに安らううんとえれまられよゆらうん次因  
川を神はくほとれなとえれよろしおて以左の勝

十八番

左 持

女房

右壁川もやさりのまことくおのづれきまゆふ力奴くに

右

説達

ありとももあもねたれみれのまよせくの埋木

えなせ玉歌之由ヤ

判云あかむ宣ふき持とを

十九番

喜用憲

左

弘昭

うふじとあ代水とひまとうてと紙してりや小山内八宣  
右 脇

経家

左方ヤ云小山内は宣すとばれを

左方ア云傍みり宣す対のうとだ筋不すちゆ

判云大奇之様れりとて似すとあへ事モ萬代水よ  
とぞうとて近ひい淺やくもか奇傍みり宣す対  
奇傍みりとぞうとぞるゝとたの字のそくとう事モアヘ  
内海へとなれとぞうとぞう奇傍みかやうのあひの事  
ヤ一や我万萬代水と底さくらんのもアヘ不意まされよ  
もほきてふまきれヒトアヘ

廿番

左 持

定家纲臣

左小綱ぬれりひととめの宣すくて人ふひ成あやとくひらん

右

信朝

あは坂の國乃こりてよふとこうしてあまより北れ歎きよもや  
石かやお思とと處を石りて又定ともいふとへどもう

左方ヤ一云ふ牙並ぬア一これ歎びに事みう

判云左方人の歌よ定もシホトヘ、もそんれ定もリと  
と歎すあらめア一モ處の國連坂の定國等ナリ可る所也

サ一番

左

立正朝后

歌をうさねじのそたれくき立拔詠そもひそく詠ひうなき

右 脇

拜詠

人をきぬ假よの下れ坂の上をれことゆう祀や立處のせめりを  
石かや三毛詠トモ歌とゆうたるうぬうとのあゆく國  
とあくモトモやうアヌアミコ也

左陳云もいをもア一宣と明テう事トハあまもうれとつ  
ねよひふうきてよまんまほ事ア一  
左ホトキモ可歎ヤ一事

判云左方 我はきものあまくつゑひきやうに仰と左  
れきゆう神原と云れようのふてば左方勝

サ二番

左 持

兼家朝后

またのせよ與らさりきれカヒテモやわ坂山のちのをれども  
左方ヤ一云ふ牙並可歎事

たののてももと越ぬまし相坂の側もかうのじうこうされ  
左方ヤ一云ふ牙並可歎事

左方ヤ一云ふ牙並可歎事

判官たふのわ坂つゝ社の勝劣なりの如くし可るおど

サニ番

季遊録

方

あひケヤセヒコシロ中うれやせくとけりこよトぬの室  
左 腹

中宮拉大丈

あらもかくも人ゆもぞくまうんれりふじやりの定りを  
右方ト云ふとこむきくよづモ

たかト云ふ事

判官たまくとえすかくももれにしこそとびろがくみ  
病氣の事

サニ番

左

女房

あひケヤセ新ちやうりうをぬの定りのとぬりの月  
右 信五

人ふれきりめうとおりひうりの因りのと明八日  
右方ト云ふ事ト宜之由

左方ト云ふとて新之由

判官たま不破ノ定の板ぬりの月とてにてトく  
はくれか新ちなどとくに波瀬の月とて水みとて  
月又とくに波瀬人ゆもとく人々やとぬの定のとめに  
サニ番 女房

左 腹

つあたをたよあそきわぐりとかくうち橋よみがけてみ

右

參信朝臣

都なりよもほりの擣の旅人や宿すやられてたまひとふらん  
左方ヤトニテ左方哥モ取事

左方ヤトニテ都思ふ事けと遠うせん事ひと  
判云左哥トモふうをもそりてや云れは國すねぬり蜀  
故の擣に題して大車駒馬よあをと又山橋ととくとひ  
て後既テ武騎をもとてすば馬道トヘリん事ふ事  
より心殊れトくじうゆめ走は久未にあくもりんと  
ゆく思ひもそへりて寄りくくしゆり石き都と  
とぞき波ふるれてモ急づから車と云ひ志のひづく  
一とそいもんや但左おひひめ川トくまみし鷹可ぬ勝  
せ六番

左 腸

定家納臣

人ひとそしれ擣よだらるをとおの家ゆりく秋のりすひう  
右

経家つ

思ふすにとぞしの擣と駒とれもれ人をまをくひづくふれ  
左カトトキ木葉少りトく行事ゆ

左方ヤトニテ左方哥モ取事

判云左方の法級擣をも侵りてて左の木葉少りお伊勢地  
理成也人れうや左方の人ぞ駒をすやかも哥モ優  
かうと人をもすやこれひうたノひだびねるの左  
坐すりトく秋の邊海ようのすて勝ト一色くや

サ七番

左

左家納臣

即くようをばくばく擣め縁もととす、ものふおをとす。

右 腕 信定

今もなとくば擣めにうちてもつれまことひハ泣にゆは  
左カヤーみあつゝのけくつとりよ事よりあきみゆと  
りふ事やもあ

左方ヤトニヒシヨ跡叶いん

判えぬ方ハきみば擣ルハ縁もとといひを取ふあ類  
トモキアシヒトヒフクの肩のから擣ねのより  
は擣め縁て後こそ擣ねも擣ふあめ他なるとふと  
りひされともなきウソモルヒテシ擣ね月と  
ハリミシテリヒキレモと極らうよりへて やと下れ  
ミモアラんふか意地うきいゑに詔事トふちとか

とつふ事事也今につれすま夜の聲を難由ぢのむへし

上トヨミシトアツヒテくすゆ以ふる脇

サハ番

左

兼家絆附

我つみやなうば擣のそむきしよおししのうて

右 脇

中宮檀大丈

うきれいさうの擣をさもあくあき拔とせつまいとくまく  
右方ヤトニ始むゆるめ

左方ヤトニ右方不被産業之片

判えた矛上の七ヌモ宣てあらびくはじ下句ふとを優

だる初ヌモう廣葉レヒツまれつまむ矛矛殊ノ縣海の  
體ゆきあらざれよまたゆくもりてある勝

廿九番

左

李道鄉

うもやくらの橋小つゆも緑ち中もやつる橋へ  
うらもやつゆもとてぬき橋もうぶの奥をとこうまけ  
たむせを猪取之由

判云此の川らきの橋を緩めかとく人の橋  
そりどりわざとそねきとゆうとを云つても  
わの橋はこう小大ともとくにしきりてゆき  
せんばのいも伊ひれへとくへふうちとと

卅番

左 勝

女房

ゑりふねの山の山ひろ波見ゆやるんうれし  
右

殊達

いやあれうのけあるとゆく年ゆうじとおせみよ  
たむせとおれ之由

判云左の川の橋をかうぢに橋りとて體をよし宣々  
はとだんかゆくやうの橋とえぬき橋達  
のひねかひておもとくゆくゆくむかしゆりむかしの勝

一番

芳草戀

並木朝臣

左

勝

わすれ人うのれのえまいのぬうをうり  
ひつれやて行ひてうりやもいとくの葉うきやも

左ふをまき事

判云あ方の心まづくまくはせあふるれとひりまうと  
わるとえあうちを左派のぬもあうひてはまほ可の膳

二番

一

古

膳

季禮彌

今をあもあも生と思ふへまうれ候のりまひの膳もまうと

右

信朝臣

よくもかくもくぬううれ我神やうひよりの候の下葉

あ方ヤマニ石穿ゆうめり

判云石穿めりキテ小神のゆゑもまうとまうと

喜びそりなくやたのすれ候まざらくまづくまづく

三番

左

膳

左乳朝臣

うちだのじ人のりまの秋ねうじのせんやうもくれせ

舜

達

あきまづやなごり思のじよくおおきうへを神もかゆた

右方ヤマニ石穿めり可歎事之由

左方ヤマニ石穿めりよまとくしてこそあまくまづく

あれりふみりくてもゆともいづく

陳云左射にさとむゆをうかれを後也

判云左射心のをれやうなれすやううし左射ゆも莫

あときあへをもゆうじ事も候よめまうだりだりゆ膳房

不ふ明持取とるや

四番

右 持

旅宿

石板草もくよあふとためぬるもくの三ちのけうふ  
逢事をしのとりふまの巻みがふれすとどね思ひ歌うり  
右 キタキテ奇不取ヤ

左方アエのりとひふまと伊ぬうそりとすとようひもく  
左見さうわとひて成りりやをまくもむうけあもと  
判云りく夜草とけめふとまくソホうきくやれよやま  
りと待ちわこねえをちらもとりくりうてしのとよ  
まのうともいきその山川ねのやうに崩けりかや  
れいぬらんあまむねすり狂うやアモクシ

五番

左

女音

人形一庭のあそらふすすりひてひよがはるるをのあ

右 持

あは

秋風よなほしくは草のえうきもとくそ人のあくろりうき

左方アエの反奇を極之由ヤ

左方アエの反上りゆく下もくじたうと

判云うの庭の残事生と又お芝と思へれどやふ思ひうりふ

きよとてれは」と云れ所のまと上よけでえうりも  
と云れて下にゆるをやうから速とかよくわくもてを

哥とおせられもよもくううぬめれあさらぬ道  
そもそもなれろとももいふの勝

六番

左 指 宅家納臣

つゝうりと我力のすらのせま思ひたるをもたれとぬけとそ

右 信

りうめするひひねうれいいうてのまのとそそがむて

左 方 や 云のまに経まのとすい

右 陳 云 忽然くまで挂くとおふとひんぐりよぬれは  
左 方 や 云 俊和くふれどりあつ成るつくるは差別  
判 云 あのかの思きを我きゆうのとひひねうちふと云  
れひ名うれすとすをゆり拂とそくくやふぐくの

七番 告本懲

右 信

弘昭

あひむりよ中よを故りかづくらうとちの拂を伊やとらげて

右 胜

信 朝

人を遣ぬ心よ志とひくももの志げをうそ不思はずもれ  
左 方 や 云 伊やとらすようと

左 方 や 云 可歎事之由 や ハナヅカレモエレルハシ  
判 云 お連理のじよろくと音ひ拂をとるるの事

左 方 や 云 お下そやいしくお守られ紫の志リ もふと  
ゆふ事もな事ともあきといやとらの木すゑありそ  
優うやゆう

八番

右 指 宅家納臣

左 三うも苏しをけよ抱かうてりとれ坐わの拂やもすえ

右 中宮位大丈

即くうち思ふと未わらうのと見ゆ出もようあらめ  
左かたき塚拘ねを汝し

左方ナ云フも曰事十九

判云々事ひとゆふ拘からてと云既行事ゆうぬうん若  
是モ史記トヤ又云晋文公之秋の妻子アムドモ我トテ  
たんシトサヌ年モテスノ歟ラヒキミ町嫁トナドト  
アルモ妻咲テサヌ年のばかりを我ナリハ上ふ拘に有ヒ  
ハシムンヒリハナムの坂こうてん約ナリ若モ事ト思ヘ  
ハシムニヤ左ナリトシテアラタクレヌムトシトシナウツメト  
ハシムニシテヨウテシ但拘櫻也に不耳ヒリ拘とすへシ  
九番

左 指

兼家羽昌

左ハリセキシモカクミルモ先モトモアトシモソシテ汝れね

右

信五

人ニシテ凡百乃機アツツ吹吹モ先モ安テナリソシテ汝れ

左方ナ云左奇ナマ取之由

左方ナ云先モ安トム行

判云左奇志モヨリヒリトキモ先モイリスルハ  
ハシム優ヘシテシハ奇危ナリミムホト云ハムシナレ者ハ  
獨ト以リ人吹スルシナミムホクシテテナリヒトヘ  
別モテムニ左方勝負不分ハ持モヤナキシ

十番

左 腸

季健卿

うつてまく我こやぬおの身ひがつゝなう故もととくをけ

十  
卷  
六

經言

波みえうみ見山木すれぬ魚の小鳴りひきよびと称す

十一  
番

九

卷之三

山ゆきた野うみりとふ生れむの村よりも船を遣ぐひとなる

右  
附

清江

奥さかまく三川すよも川崎川の北さりとのすみ  
瓦山也移転之由ト之

卷之三

到る程の事なるべくれ松を奥山などよりをばくにてくまもと  
もゆうめと考へゆのきしわく残歌との事かうそやう  
かゆうてあたうねくゆふはれ山の松を只やどりせられ  
生じてくことやらくもく瀧川の松をまとひすれをよ  
りけくゆのといちんすら不自由とぞこれと譽めきりと  
云れむがくこゝに神とゆく所とゆく事せざる事そ  
トもくゆるもくゆる筋

十二  
卷

左  
持

女房

わがひよこうちゆを便ともかくやうすきゆの庭の松風  
右　あらわし　あらわし

判云左吹ふふとらりとふ行もの思のふとくにはうち  
ひりぢりうりうりゆきりよせりひらとやまゆいねれゆの  
ふといゑうすとよせりゆまゆて西方をよ優りうりゆを  
十一ゆりおとぞくや

十二番 安樂戀

左

女房

時もあまをよきかへるもむだぬくらとよそわやねく  
右 股 中宮擅大丈  
あはれやとぬぬとほくねあてるり独りの寂しさあはれ  
たかやとえを争ふとほく思ひきりくや  
左方やとえ互可取争

判云左吹ふふとらりとふ行もの思のふとくにはうち  
ふか下うねぬよやか争ふ事にやめりふ勝よひてし

十四番

左

李道

人をほほのさうかの罪ふくとくらさんじふとまつも  
左 經歌  
うりのを山鳥の一ふくをつづりつづりうきうき  
左方やとえ不被取之由

左ゆやとえ上ありまじりと

利云の井ふみ山あいにとだりうや

十五番

左 肺

易家

島のなきあは人のなふされやをめそつまひぬれをまう

十六番

家隱

ツシトモをうねりに尋ねておもとよかとやむじう  
お方ト云なればれやうりあるをぬつまう  
石あヤ云せとうらん狂たみけゆう志よくらんす  
判云島のるばれがれやうりあるをせよ又ぬい切とうや  
もぬもはうんとこくらぬ詞をももくくづく  
ハやまのぞとれほときやもしらんむきの心もそくりく  
の子ゆもいつときらもたかづけうそくらんむく  
十詞もやたらひちのよそづけあもすくらひのひもの  
包ぐれも以ての勝

十六番

た

至高朝后

玉葉のそくふぢうたくひまゐれうとのそくとくしま

右

勝

信定

思ひうめうだもの徒みぬけて候の川アキモタクシマ  
お方ヤ云うきたの川のかきうどくふ伊ア

お方ヤ云うきたの川のかきうどくふ伊

判云石あれの後こだるふ事ておせんのりぞくとくす  
と云ひれア云うきたの川アキモタクシマ

ふ事ておせんのりぞくとくす

きこゑたか歌を地の下にあたう鈴するをふうへ後  
事びれた哥ひれてアキモタクシマ今をや

さあまきわづややねう

十七番

左

弘昭

山もれれむのくじけ林もくすれおれ  
右 勝 滋信朝臣

あれどりのみまのふ鳥林までりあめらるぬものくじく死  
お方やまを争ひヤマ歌事

たかやまきやまのうわをばよくよまれたもいふ  
徳年ハねれり證年ばなくてはい。

判云西首の山鳥ハ鐘ト一書てたまうけうるえりその  
まくとてみしゆ壁ト一あとも各古よ事とかく  
きりとくにまのうわとのまくえ證えりかづえ由、  
ぬ行ソつれの野によびて謫まといふ想よりやも

やゆ方のねきりのれうりと云たしりもゆくこむくと  
うくに遙ようとをきらふ又勝ヒヤルくや

十八番

左 勝

寛家朝臣

鴨のぬれへ江の波と心をひとと神とうりゆくくひのれ  
右 踏 錠達

内川乃きりぬひの波と心をひとと神とうりゆくくひのれ  
お方ヤマえ胸と神とうりゆくくひのれ

方陳え神小婆のともソシヒ思へとしゆくよりくも骨と化  
と小さしんを争ひ腹を詮

石あやまを争ひ骨を詮

判云争事あるの四音字もゆくしむ争ひ骨を詮

但事りとじとをか馬をくよととされ夜経の二字をうち  
迄のひすゑれもやゆてもとくか馬ハ事うりばれ  
ゑすくりくやるうをひかと祀さまさびへたや

十九番 化成の考熟憲

左 持

兼ふ羽臣

うおじ人のひをわくよまれそろしきつれをまぢり

右

經家彌

志成はとせま、野ふもじく下のをらられよる力とそつて  
左あせ「云後お守云ふりのほりものうそせにひ  
く下りとそろしまでぬほく神社と云れまに日事や  
判云西方く下せふゆくまよ一方人ヤ一可るね

廿番

た

季禮つ

ツホトツれりまかとやすもへまわれもむきぬもきを

右 脇

中宮禮大丈

ぬをとりもりもくうくうの湯よ草をかえもふづもうする

六方ト云攜りして後いづ

左あやまふるア云持事之由

判云左守方栗葉よものもとすゆうん物もか川もすれ  
きのほきのやぬもりよとくと云れ守のひとよ  
て後きれりけとくあへんよぬへし下ととげなく  
てふりつてのち中ともつゝうの湯よまねももも

まくうのこりとるよりよとけぬきとなつまきうちもろ  
まきせすりのらんうりもぬさりな

サ一一番

左 胜

支那名臣

うやぬをぬすけの床をやどくとく歎もぐくとねり與を

右 海信朝臣

いそて玉れぬを計の床にカとくをしてませ寝シテ不與ひとも  
ふ方カタ云ゆ又字カタ小くやまわりとひを小く

方方カタカタニ床カタカとくをん事イフ

判ふるのぬを計の床カタヌ又字カタ小くまも少く  
と云カタ西氣カタ之由不破カタ詞カタぬも床カタカとくをん  
とゆカタ然カタニモノ既カタて安らカタヒモイキカタやゆた  
ふと計の愛カタりやカタかカタもとめらうカタも計カタやまと  
とうくらくすカタもとむへカタや

サ二一番

左 胜

支那朝臣

唐臘のうぬそりよへうもぬよふひうのまうあやうき

右

高麗

我有カタ人カタ核カタのカタ波カタりカタうひカタ一カタ物カタのカタもとくめす

左方カタえらひカタりカタやカタ小あカタまゆカタサカタめ

左方カタ云カタ石カタ計カタ毛カタ之由

判カタ云カタひうのまカタやうまカタく事カタも人カタ核カタく浅カタ事カタもはう色カタや伏カタうの里カタのあけカタじりせカタ一人カタ乃カタ波カタりカタえと云カタ毛カタ之由カタ通カタ一カタ物カタひばせカタりカタよう山カタ取カタめれカタも奇カタ破カタりて人カタと核カタよカタてんこカタ不使カタなカタ魚カタ一カタ又カタ以カタたる勝

サニ番

左 指 旅照

カニ持て思へとゞく唐國のやうふをたすり取とほほさん

右 指 旅達

唐のとうぬを鳴もるたづら舞はむね中のうと見りきと

左 指 あ虎さめ事之由ト之

判云あかんこらたハとうぬをあとりひふをやらぬを鳴と

りく卫聖きよそ家の事うらうとりアシナムヤお鳴と

いをうせよあくらくまくあ回鶻ナムヘシ

サニ番

左 指

女房

はうれ心のをとまそアヌハ麻をくみへのねじゆふくれ

右

信元

えひもすそひくあふ康るて人うつ地不ひみよまひ

左 指 三郎之由

判云左ニ麻鳴せ人のねにタ余情絶盡空ぬれと右手

人情少ぬくふせと云ひひ勢げてあかすてくく空

きくはあまくふと云ひ持と

サニ番

考虫戀

左

旅照

かきもと年経意をまれにうととよの秋やほしみとへき

右 指 脳

中宮位大丈

独ふもりりくしのうと云ひへうひ明をきりくとく

左方ト云ふところの秋伊事トみりとくの事

古陳立日年記ノリシとテう里てところの神也締して今

人信之事アリ

左ヤテニ虫ノミシモヤテスル也

判ニ左守虫と號て神とモニ御事ミシモ害虫迄少なく  
テハ己類トウリヘンノキトヨアの奇モ御忌ムニ  
セシナトニシテ約れニ起居而シ事ナシ御事ナシムニ  
強モモ急いてクモ詮サリノヘ一虫ハシムカモ奇の  
類取トシナリアトクモナシ候ナラヒムシカモ竹取ムハ  
隨キリノクモナリシスラヒムシカモ竹取ムハ筋

祭出子細事弊不詳注判討仍注シ紙

日中書紀武太乙天子賊主乞喝天皇  
星極天皇  
三年秋七月巫云不出所色人太生致多勸祭虫於村里之

人曰シ若乃世邪若殺而与亥巫覡等遂訴訟於神達曰祭常  
ニ世邪若貧人致焉老人還少由量カ勸民家貲寶陳酒陳菜  
六畜於牆側而仗呼因射過入不破 鄙之人也者世虫並於  
活座寄僚求疾并捨除賊鄙毛所益損費極甚於乞葛  
秦造酒通民所本打火生致多其巫覡等恐伏モ勸祭可人便  
絕寄因禹部麻佑波打徵騰母柯徵騰枳峯安俱騰峯以  
猶柯激乎ア名政ニ麻須母波虫老乃ナ櫛樹或ナ放勞株  
勞株此上裏方比  
似卷蓋

廿六番

右

立訖明后

ナリシモ望ムシテ之の情ヲ人ナメナリムナハアラマヒ

卷之三

澄信朝臣

ちくなくわざむるモトハ小まきれりもおぬうひのよば振下ひ  
左心セテ又蛇蠍ヤマシロ之由

左心吃了兩隻蠍子，是取之由

かあ方のくもれゆづりひせよ優なりアリ仰もと仰たの  
カトの又字ぬかよを優り詞ばれと争ひよそまもむは  
らぬよ石もゆのうきにゆきと云れようしゆとお  
めぬうひのとえりや争ひてきこもうと良せぬもくへ  
まうひまうとをソムとみてあうりとこうううみて行  
め生ゆ一かじえこうひアリゆんとうのよひとみて  
ねのううてある／おモテまきあくや

卷之三

左  
周易

兼家

史の筆もれとよみつと服じゆうとしゆ思ひやたらひなの心

卷

家禮

夏もせうやまもれの夜があるをぬきの間も

卷之三

たあやへ云ふゆきも之の如く

判云たゞハ人間歌之由ヤテ云こむすがみももと  
云れ秋ハももすとされフや意と是處とのふ名小けにて  
秋うらん様かよしん事をいづく明月集ゆり夏秋もそ  
たてこれき同集の詩アモ万點水雲秋葉やとソ人里瀧  
安仁ノ秋の興賦中も燭耀の黄階闇小虫蟋蟀のさりく  
と竹屏よ写とほくまうじ秋意不可勝計といづくそ秋を

廿八番

左勝

季澄つ

翁ふもゆめのをしけきりくを我ばも引れ神とやふ小

右

信宣

あづくゑあきとねへまうくも花の下力秋のゆふれ

右方ト云を奇ヤト喜可取事之由

左本ヤト怪曰

判ふたぶんさとくを諭訓せ俊義に穿しゆりむとお詠さ  
翁と思ふとされ我忘のひすくなく筆とぞめにまほ方我  
翁のとぞ不れ神と思ふにとえよ遠の心ますをくわ左の  
勝ト可ト居るや

廿九番

左勝

女房

つりらんかトシテアツめ萩原やト竹むりのひとふく

右

経家帰

翁もとうる人皆虫のゆふと我方ばうふうそをてうゑく

右方ト云を奇ヤト喜之由

左方ト云を奇喜通也

判云みゆのねじし石中トアツめとりひて詳とふく  
とえれともね虫も上下ひ是うとさんゆもやくし  
右奇玉下に附けの事より難以左可る勝

卅番

左持

定家綱

翁の奥怪ろゆうとひやくはくはくぬうじ此も

右

寒蓮

この人のなりあつてあくわうん恨うよすゆね虫のうる  
方むまう感氣

判云瓦寄ひもうぬまう虫の祥と云ひ宣給して石哥  
又孙の氣えやすけりんと云ふも瓦ぬじうれども  
得うん賤負じ不ふぬ仍ぬ持

左大將高六百番秋合卷第七終

110X  
355  
8